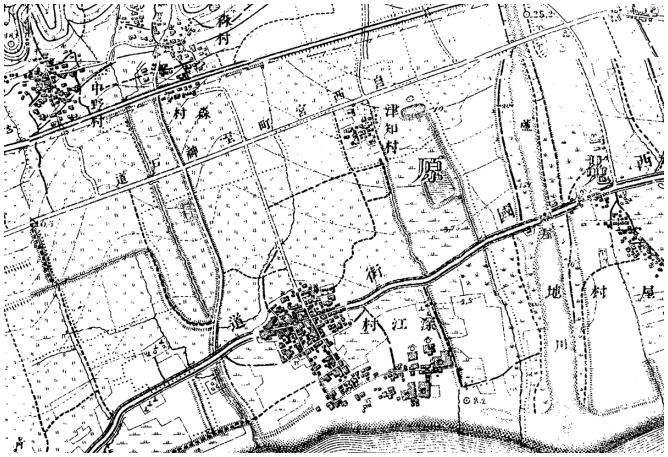
深江物語（9）

新道と旧国道

深江塾　森口健一

新国道から旧国道へ

明治十八年（一八八五）の陸地測量部の「仮製地形図」（左図）を見ると、深江の集落は東西に一本の道が貫いている。芦屋川の永保橋西岸から、芦屋と深江の境界である傍示川をまたいで深江に入る。これは西国浜街道であるが、「仮製地形図」では「西国街道」となっている。通常西国街道といえば、現在の国道二号線をさすが、明治前半は違って浜街道の方を西国街道と呼んでいたことがわかる。



当時、深江には浜街道と札場通が交差するところに集落の中心があり、札場通に沿って南の海岸近くにもう一つの集落があった。深江の町は二つの集落からなっていたと読み取れる。札場通は海辺の浜エビス神社付近から森村まで延びており、いわゆる「魚屋（ととや）道」とはこの道ではないかとも言われている。

大正十年発刊の『武庫郡誌』によれば「所謂西国街道は、精道村より来りて、本村に入り、深江・青木・西青木の各字を貫きて魚崎に入る。明治二十二年までは、精道村打出より稍々山手の方を通り、本村北部を通過せしものなれども、同年打出より神戸に通ずる海辺の里道、国道に編入せられて、即ち現状となりしものなり」とある。ここに書かれている西国街道も浜街道のことで、明治二十二年までは北部を走る現在の国道二号線が国道だったが、この年、南を走る浜街道が新国道となり、国道二号線は旧国道になった。西国浜街道は、浜辺の発展により「仮製地形図」では西国街道と呼ばれていたが、こうして国道の地位も得たのである。

このことは昭和十一年（一九三六）に発表された谷崎潤一郎の小説「猫と庄三と二人の女」（新潮文庫）の解注とも一致する。すなわち昭和二十六年発行の文庫の解注には「旧国道　京都と下関を結んでいた旧西国街道が、一旦、国道となった後、明治二十二年頃、一般道路となったため、旧国道と呼ぶ」となっている。

ところが解注は続けて「西国街道は、蘆屋・神戸間では南北に分かれていて、山側の街道は、昭和二年四月に阪神国道（現・国道二号線）となって、新国道と呼ばれるようになり、海側の旧浜街道（現・国道四三号線）が旧国道と呼ばれた」とある。つまり昭和二年にもう一度国道の場所が変更になり、浜街道は新国道から旧国道になったというのである。このため深江を通る浜街道は、旧国道とも呼ばれた。浜街道が「新国道」「旧国道」と呼ばれ、紛らわしくなったのは、こうした歴史によっている。

ちなみに本庄小学校の校庭の南の塀に沿って松が並んで植えられていた。これらの松は、浜街道に沿って並んでいた松をイメージしたも

のである。深江の浜辺は芦屋方面から松林が点在していたと伝えられている。現在では小学校に南東角に「名残の松」の碑、更に東には「踊松」の碑が残されている。

浜街道と新道

地図上では札場通付近の集落の南の端と浜辺の集落の中間にもう一本の線が見られる。これが後に「新道」と言われる道で、神楽町（現・深江南町一丁目）と東町（現・深江南町二丁目）の境である津知川の西岸で西国浜街道から分離している。新道は、大日神社付近を抜けてくる浜街道と、本庄小学校の東で再び一つになる。

明治十八年の「仮製地形図」にある通り、明治時代は浜街道が深江の東西の幹線であり、その南の新道は地元の生活道路としての所謂「里道」であった。ところが大正十二年（一八二三）の地図（下図）では、新道が浜街道より広く描かれ、新道に「西国街道」と記入

している。明治十八年の地図とでは浜街道と新道の地位が逆転している。以降昭和四十年代になって国道四三号線が完成するまでは、深江の町の東西の幹線は新道であった。今日では国道四三号線ができて消えてなくなった道だが、商店が立ち並び古くから深江の生活道路として存在した道である。

新道は、幅員がおよそ三間、約六㍍弱の道であった。大正十二年や昭和二年の地形図を見れば、深江の集落は新道の南で増加が見られる。この結果、浜街道より新道の方が重要視され、深江では最初に舗装され、深江の東西の幹線道路と位置づけられた。

防潮堤の役割もはたした新道

浜街道は周りの土地との高低さがほとんどない道であった。一方、新道は舗装するために若干の盛り土をして地盤を固めたせいであろうか、沿道の住宅地よりわずかではあるけれど道路地盤が高くなっていた。現在の国道四三号線沿いの標高が概ね二・〇㍍ないし二・五㍍であるのに対し、深江南町の大部分は一・五㍍から二㍍である。

深江は、防潮堤が昭和二十六年（一九五一）に完成するまでは度々台風による高潮に見舞われた。防潮堤ができるまでで、戦後の一番大きな高潮は昭和二十五年九月のジェーン台風であった。このとき高潮は、新道の手前まで押し寄せたが、新道の南側で止まった。新道が深江の北地区への海水の浸水を防いだのである。

ジェーン台風のときの高潮は、津知川の西岸の南付近で大人の膝くらいの浸水であった。ちょうど新道の道路面と他の地盤面との差くらいまで高潮が来ていた。新道を越えて北側は水田が多く地盤は低くなっているから、この道がなければ、高潮は深江南町地区だけでなく、少なくとも阪神電車の軌道敷あたりまで浸水していたはずである。

ただ、昭和九年の室戸台風の高潮は新道を越えて、阪神電車の南までやってきた。この台風は昭和の三大台風の一つであり記録的な台風

であるから、新道の路面高さでは防ぎようがなかった浸水である。

新道の往来、そして国道四三号線へ

昭和三十年代の初めの頃まで、この道を通行していた車両は「バタコ」とか「バタバタ」と呼ばれた「くろがね」や「ダイハツ」のオート三輪である。この名はエンジンの音がバタバタと聞こえるところからその名がついたようである。ちょうど現在のバイクや単車のエンジン音を大きくしたような音であった。ちなみにこの「バタコ」は昭和三十年代半ばになると「ダイハツのミゼット」というオート三輪にその多くが取って代わられた。

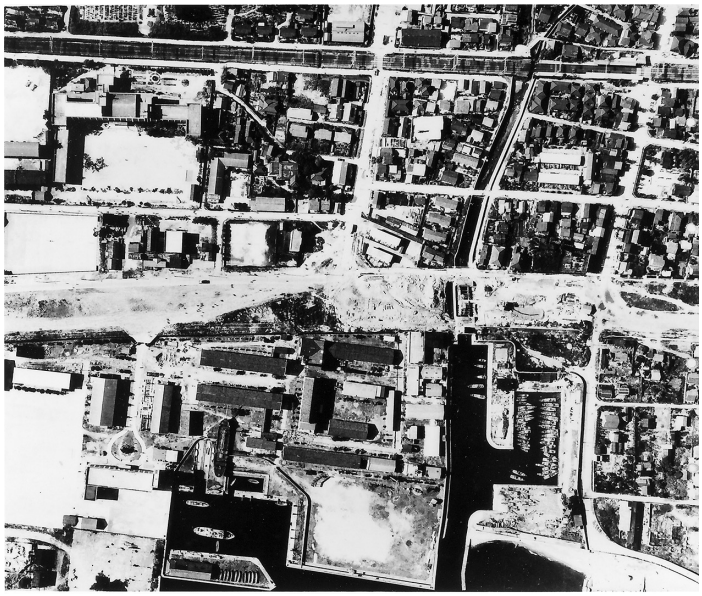


写真１　昭和34年ごろの高橋川上空付近。
東西の太く白い部分が国道43号用地

一般の乗用車は国道二号線を利用しているのか新道では殆ど見ることはなかった。その乗用車も国産ではなく大きなアメリカ車ばかりであった。

新道には「バタコ」とともに牛や馬に引かれた荷車がゆったりと行き来していた。車道と歩道の区別も無い道ではあったが、町の東西の幹線としてそれなりの賑わいのある道であった。

昭和三十年代半ば、国道四三号線用地の買収が進み深江の阪神より南の地区全体は大きく南北に分断された。現在の国道四三号線は深江地区においてはその大部分が、新道を北側に拡幅して造られ、四三号線の大阪方面行きの車線は買収によって住宅などが移転された。これに対し、南側の車線沿いは概ね現状で残された。幅五〇㍍の広い土地が高橋川から芦屋の永保橋まで広がることになった（写真1、2）。「この道は戦争になったら滑走路にもなる」と訳知り顔で言う子どももいた。

子どもと新道

新道は子どもにとってもたのしみの場でもあった。

写真２　工事中の国道43号

昭和三十年代半ば頃までのことである。「ロバのパン屋」である。

「ロバのおじさん、チンカラリン、チンカラリンとやってくる。ジャムパン、ロールパン、焼きたていかがですー。チョコレートォパンにアンパンなんでもあります。チンカラリン」という楽しげな軽やかな音楽と共に新道を東のほうからやってくるのだ。本当はロバではなく馬がパンを乗せた荷車を引いているのだが、まるで童話に出てくる馬車のイメージの移動式のパン屋さんであった。

そのパン屋がやってくるのは、子どもたちが学校から帰って遊んでいる午後の時間が多かったように思う。毎日来るわけではないけれど、子どもたちはそのメロディーが聞こえてくると走ってパンを買いにいった。買うだけでなく「ロバが引く馬車」の後をしばらくついてある子どももいた。

荷車を引くのは小型の馬（木曾馬とも聞いた）だったらしいのだが、子どもたちは本当にロバがひいていると思っていた。「馬」は子どもたちがパンを買っている間、じっと立っている。しばらくするとまたメロディーと共にポコポコと荷車を引いて去っていく。何処から来たのか知らないけれど、うつむいて黙々と、荷車を引いていく馬を見てなぜか童謡の「月の砂漠」の情景が思い出された記憶がある。

平成二十五年の春、神戸三宮の国際会館の南でこの「ロバのパン屋」を見かけた。三宮センター街の東出口でこのパン屋のメロディーを何十年ぶりかで聞いて、筆者は童心にかえって見にいったのである。蒸しパンを買いながら「何処から来ているのか」と聞けば、京都からであるという。このときのロバのパン屋は馬ではなく車であった。

そういえば、ロバのパン屋は昭和三十年半ば頃以降には見かけることはなくなった。新道が国道四三号線にかわるころであり、世間が車社会の入り口にさしかかっていたせいであろう。ロバのパン屋が新道を歩かなくなったころ、牛や馬の荷車も姿を消した。

子どもの遊び場として

新道は子どもの遊び場の一つでもあった。往来する牛や馬の荷台に便乗することである。学校の帰り道にその荷車を見つけると、御者に隠れて荷台の後に飛び乗るのである。荷物によっては子どもが荷台の後に乗っていることは御者からは見えない。上手くいけば学校から自宅近くまでほとんどを荷台に乗って帰ることができた。

ただ、時には御者に見つかって飛び降りる羽目になることも少なからずあった。荷台から飛び降りると、運が悪ければ糞の上に足がはまってしまうことがある。牛や馬の糞は結構大きく子どもの足がすっぽり入ってしまう。不思議なことであるが、それらの糞が不潔とかと思わなかった。新道の横に流れる水路で洗うだけのことであった。牛や馬の糞は乾燥させて燃料にするとも言われるからそう不潔不衛生というわけでもなかったのかもしれない。

新道を利用しての子どもの遊びは、芦屋方面と深江方面の路面の傾斜を利用した「飛行機」という遊びである。芦屋と深江の境界である傍示川あたりと津知川あたりまでの地点の標高差はおよそ四㍍ある。国土地理院のデータによる傍示川西岸で六・六㍍、津知川西岸あたりで二・七㍍となっている。

道具は長さ一㍍幅三〇㌢の厚さのある板を胴体とし、同じような板を主翼に見立てたものである。それらの板の下にキャスターをつける。胴体の上に腹ばいになるか、腰掛けて道路の傾斜を利用して滑降するのである。

「飛行機」と路面とはキャスターの高さの差しかない。滑降しているときにバランスを崩すことも少なからずある。骨折にはいたらないけれど、擦り傷は付きまとう危険な遊戯ではあった。それでも舗装された道は新道だけであったからこそできた遊びであった。